
Sharp

殺人パンダ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sharp

【著者名】

殺人パンダ

N4529F

【あらすじ】

魔法と科学が交わった世界その世界に生きる“吸血鬼”と“狼男”この物語はとある一人の人間が自分の信念と欲望の為に生きた人生を描いた物である。

1話「脅迫」

田舎のとある村の小さな酒場。

テーブルにもイスにも埃が積もり、唯一綺麗に掃除されている力
ウンター席にも土曜の夜だというのに“客”は一人も居ない。居る
のはこの酒場の亭主である、20代の青年が一人だけ。

青年はグラスに入った水を飲みながら店内を見回す。

今夜もいつも通り暇だな。

満足そうに視線をグラスに向ける。氷がカラーン、と音を発て溶
ける。

静かな夜が過ぎて行く。そう思った矢先、店のドアが開かれる。
現れたのは男。体にマントを巻いているがその上からでも分かる
ぐらいガツチリとした体付きをしている。

「カンナ・イスズだな」

無精髭を生やした男はそう言つと、カンナの所に行き、水入った
グラスの横に黒い封筒を置く。

「魔術協会東中央支部から来たバルデスと言つ者だ。仕事の依頼を
頼みたい」

バルデスと名乗る男から渡された封筒を開けて中身を確認する。
読み終わるとカンナは手紙を封筒の中に閉まってバルデスに差し
出す。

「もう、殺しはしないんだ」

「殺しじゃ無い、犯罪者を捕まえる手伝いをして欲しいんだ」

「断る」

カンナはグラスの水を一気に飲み干す。

「コイツを読む限りじゃ相手は殺人鬼だ。しかもかなり特異なタイプの。そんなヤツをどうやって殺し合いをせずに捕まる？ 仮に殺さずに捕まえたとしよう。でもソイツは間違い無く死刑だ」

「しかし、ソイツは罪を犯したんだ。罪を犯した者には相応の罰を。オレは当たり前の事だろ？」

「それでもだ。“死”片棒を担ぐような真似、オレは「メンだ」

そう言ひと席を立つてカウンターの中に入る。グラスを一つ取り出し氷を入れるとウイスキーを注ぐ。

「オレの奢りだ。それ飲んでさつと帰つてくれ」

カウンターにグラスを置く。琥珀色の水面がゆらゆらと揺れる。バルデスは小さく溜め息を吐くと、パチンと、指を鳴らす。ドアが開き、マントを着たツインテールの女が姿を表す。そして女と一緒に現れた人物に息を呑む。

「テメエ……！」

「おつと、動かないで。」お婆さんの頭が吹っ飛ぶわよ

村長の頭に拳銃が突き付けられる。

怒りの籠もつた視線をバルデスに向ける。

「「チラもコレ以上、被害を出す訳にはいかんのだ」「マイシ!」……。

カンナが右腕の手首にハメたブレスレットに魔力を込める。すると銀色のブレスレットは高熱で溶かされたように形を失い、腕の表面を覆っていく。

「いや『銀狼』でもこの距離からじや何も出来ないでしょ?」

「オイ、シルヴァー!」

シルヴァと呼ばれる女はバルデス怒鳴られるが、気にした様子も無く「チラに挑戦的な視線を向けてくる。

「殺しあはしねえが、腕の一本や一本は勘弁してもらひやん!」

踏み込む為、足に力を入れる。すると店内に怒声が響く。

「ならんッ!」

「...」

その場に居た全員が村長を見る。

「カンナよ、いやつらに手を出してはならん!」

「何故です村長ッ！？」

「人質はワシだけでは無い。村人全員じゃ」

「つな……」

カンナは言葉を失う。村長は悔しそうに顔を伏せる。

「さっきも言った通り、生憎手段を選んでいらっしゃる状況では無いのだ」

バルデスがカンナの前に立つて言つ

「腐つてやがる……」

「何を言われても構わない……。だが、君には一緒に来てもいい」

カンナは奥歯を噛み締める。

「ずまんカンナ……」

村長のその言葉がカンナがこの村を出て行くまでに聞いた最後の言葉だった。

1話～脅迫～（後書き）

1話終わりです。

機会があればまた会いましょう。

2話／ルール

村を出てから約6時間。ワゴン車から見る周りの景色は森や草原から、ビルが立ち並ぶ都会の風景へと姿を変えていた。

カンナは三列ある席の一番後ろに座り足を組んで窓の外を眺める。不意に村長の最後の言葉が浮かんだ。

「…………」

苦々しげに小さく口元を歪める。

それを見ていたのか前の席に座っているシルヴァが「チラを向いて嫌みな笑みを浮かべる。

「あのお婆さんの事でも考えてた?」

「…………」

「あんたもしかて熟女趣味? キモーい」

あからさまな挑発にカンナは呆れて溜め息を吐ぐ。それが気に気に入らなかつたのかシルヴァはさらにつつかかつて来る。

「なによ、文句あるなら言つてみなさいよ」

「香水臭い。少し離れてくれ」

「つなー?」

「頭だけじゃなくて耳も悪いのか？ 臭いから離れろと言つたんだ」

「アンタね……！」

頭に血が上つたシルヴァアが腰のホルスターに入れた拳銃に手を掛けると、喉元にカンナの手刀が突き付けられる。

銀色覆つた腕の指先は尖つて、刃物のように鋭利になつている。

「そこいらへんのナイフよりは切れるぞ」

シルヴァアが息を呑む。しかし、直ぐに口元に笑みが浮かぶ。

「アンタ、殺しあしないんじやないの？」

「…………」

「安い信念ね」

「オレは別に信念やら何やらで、殺しをしないんじや無い。ただ単に飽きたからだ」

空気が凍りつく。

「今さらお前を1人殺した所で、オレにとつてはアリを踏み潰す事と変わらない」

カンナの指先がシルヴァアの肌に触れる。血液が染み出す。

「そこいらへんにしておけ

ハンドルを握ったバルデスの視線がミラー越しにカンナ達を見る。

「…………

「…………

カンナが腕を下ろしたのを見計らつて、シルヴァは助手席に移動する。

「悪かつたなカンナ。もうすぐ支部に着くから我慢してくれ

バルデスの謝罪を無視してカンナは再び窓の外へ顔を向ける。

「じじが東中央支部だ」

車を降りるとバルデスが言つ。カンナは、どうでもいいとばかりにボンヤリとしている。

「じゃあ行くか」

バルデスに連れられて病院のような白い建造物へ入つて行く。

綺麗なタイル張りの廊下を歩いて行くとエレベーターの前で止まつてバルデスがボタンを押す。

カンナは相変わらずボンヤリとしたまま口を開かない。エレベーターに乗り込みボタンを押すとバルデスが口を開く。

「車の中ではホントに悪い事をしたな

「別に」

シルヴァは先程車を降りるなり、どこかへ消えてしまった。

「いや、あんな非道な事をして君を連れ出して、その上あんな事を言われたんだ、怒るのも無理はない」

ホントに申し訳なさそうにバルデスは瞳を伏せる。カンナは小さく溜め息を吐く。

「アンタ達の事。恨んで無いと言えば嘘になる。村での事も“昔の事も含めて”」

「.....」

「でも、今は嫌いなはずのアンタ達と同じ魔術師。オレは目的の為なら手段を選ばない。それこそ脅迫、拷問、殺し、何でもしてきた」

カンナはホントに生きているのか疑いたくなるような綺麗な瞳でバルデスを見る。

「だから今さら、正義を語る資格もましてや道徳なんて概念はオレには無いのさ。あるのはたった一つのルール。」

エレベーターが止まりドアが開く。目の前に一つの扉へ続く一本の道が現れる。

「『殺さない』
それだけだ」

2話 ルール（後書き）

閲覧ありがとうございます。
また機会があればお会いしましょう

3話「異常への扉」

「開けるぞ」

「勝手にどうぞ」

強固で巨大な扉を前にもかんたんに開ける。カソナは特に緊張した様子も無く、悪態をつく。それに引き換えバルデスはさつきまでの落ち着いた雰囲気が薄れ、どこか緊張している。

「一つ言い忘れていた」

「何か?」

「扉の向こうは君の想像してるとは遥かに違うので、その……あれだ……あまりビックリしないで欲しい」

特に何も想像していないのだが。

「構わない。開けるならさつと開けてくれ」

「分かった」

バルデスは喉を呑むと一気にドアを開く。
扉の前に広がった光景にカソナは息を呑む。

「…………」

「カンナ……そのだな、支部長は好きなんだ」

「「」や～」

「 猫が」

トラ猫が一匹カンナの足にすり寄る。
部屋を見渡す限り、猫、猫、猫、猫。まさに猫屋敷ならぬ、猫部屋だった。

猫さえ居なければ、至って普通の部屋なのだが、床に転がっているボールやら何やらのせいで全て台無しである。

「ありバルデス大佐。お帰りなさい」

屈んで猫じゅうじを降つてている茶色の長い髪の女が微笑みながら言ひ。

「只今帰還いたしました……つてまた増えてませんか？」

バルデスは軽く敬礼すると田の前の惨状に呆れたぎみに言ひ。

「また拾つちやつた。テヘ」

「テヘって……少しば歲を……」

「あなたがカンナ・イスズ君ね」

バルデスの言葉を無視して女はカンナに視線を移す。

カンナは無言のまま女を見る。すると女は立ち上がりて体を口チラに向ける。

「魔術協会東中央支部、支部長をしているレイナ・ステージアです。よろしくね」

「コイツがここ」の親玉……。

蔓延の笑みで言つレイナにカンナは鋭い視線を向ける。

「なあアンタ」

「何ですか？」

「笑うんならもつと上手く笑うんだな」

「あら、私の笑顔つて不細工ですか？ レイナなショック！」

「瞳が笑つてねえんだよ」

カンナの一言で一気に空気が張り詰める。隣に居るバルデスからも緊張の色が伺える。

「オレをわざわざ」んな所に呼んで何考えてやがる」

「大佐から聞いてませんか？」

相変わらず薄っぺらい笑みを浮かべながらレイナが言つ。

「今回の事件。確かに犯人は異常なうえに特異だ。だが、あの資料を見る限りどう考へてもオレは必要無い。天下の魔術協会の、それも中央支部ときたら戦力は充分の筈だ」

レイナはそれを聞くと威厳ある机に向かう。椅子を引いて座ると机に腕を置く。

「今回の事件。始まったのは五年前。
最初は1人。首に蚊に刺されたような後を2つ持つ貧血の患者がこの近くの街で出た。一年後は2人、二年後は3人と徐々に不信な貧血の患者は増えていったわ」

カンナは質問に答えて貰っていない事を不満に思いつつ話を聞く。

「患者には共通してさつき言つた首の傷があつたわ。そして去年の暮れ、遂に死者が出た。死因は出血によるショック死。でも現場からは血液は1ミリも発見されなかつた。なのに死体からは体の半分異常の血液が無くなつていた。鑑識が傷口を調べた結果、微弱な魔力が検出されたわ」

「まさか……『異常への扉』…………」
ヴァンパイア・ロード

カンナが呟くとレイナは小さく頷く。

魔武器、ヴァンパイア・ロード。

何十年も前に魔術協会に所属するとある武器職人が考案した武器で、体に核を埋め込む事により使用者の身体能力、魔力の絶対値の強化に加えてさらに犬歯が強化されて吸血が可能になるという物だ。しかし、この武器には大きな欠陥があつた。使用者が血を欲するあまり凶暴化するのである。

当初の目的では強力かつ、従順な軍隊を作るために制作されたコレは上記の問題と人が人の血を食らうという余りに非人道的な事により制作は中止、破棄された。

「全部破棄した筈だろ」

「表向きはね。実際はいくつか裏ルートで流れたみたい」

「それがバレたら協会にとつてかなりマズい。それでオレにソイツを捕まえろと？」

「コチラも努力したけど既に小隊が三個、ターゲットに潰されているわ」

「ふざけんなっ！！」

カンナの怒声が響く。

「人質とられて連れて来られてみりや、協会の不祥事の尻拭い？
なめんのも大概にしどけよ」

右腕を銀が覆う。

「今すぐテメエ殺して、この支部潰してもいいんだぞ」

カンナが踏み出すとバルデスが立ちふさがる。

「までカンナ！　話を最後まで聞け！」

「話なら全部聞いた！　テメエも何処かねえと八つ裂きにするぞ！」

「ユウナ・イグナイト」

「…」

カンナの体が硬直する。

「聞き覚えあるでしょ？」

「何でその名を知っている……」

「教えてあげましょうか」

レイナが微笑みながら言ひへ。

3話～異常への扉～（後書き）

また機会があつたらお会いしましょう

4話「日常」

温かい水流が頭のてっぺんから床まで体を伝う。シャンプーをして頭を洗う。独特的のスッとする臭いが意識をハツキリさせて行く。バルデス大佐が指揮する部隊、『特別戦闘部隊』。通称“特戦”。そこに入つてからかれこれ3日が経つた。

カンナはノズルをひねり、シャワーを止める。腰にタオルを巻くと個室を出る。

脱衣所に着くと自分の胸辺りまでしか身長の無い少年と出くわす。

「お疲れ様ですカンナさん！」

少年は元気よく挨拶してくれる。

同じ部隊に所属するアルト・エンパイヤ。若干14才にして特戦に入つたいわゆる“天才”。だが性格はこの3日間 正確に言うと2日とちょっとだが、一緒に過ごした限り、礼儀正しく勤勉でとても真面目な少年だと思つ。

「お疲れ」

素つ氣なく返して着替えを始めると、アルトは近くにあつた椅子に座る。

「今日も訓練大変でしたね」

「そうだな」

「でもカンナさん凄いですよ！ 特別な訓練も受けて無いのに普通について行けました」

「そりゃどうも」

「年齢だって僕と5つしか違わないのに」

カンナはカッターシャツのボタンを止めしていく。

「シルヴァさんやライカさんとも互角に戦ってる。ホントに凄いですよカンナさんは

何故かカンナはアルトにとても好かれているようだ。
ネクタイは付けずに白のスーツに袖を通す。

「なあ」

「何ですか？」

「あんまりオレに関わらない方がいい。お前まであの女に邪見される」

所詮一時だけの仲間だ。親睦を深める必要はない。

カンナは自分にいい聞かす。

「あの女って誰の事ですか？」

「二二一拳銃のヤツだ」

「ああシルヴァさん。大丈夫ですよシルヴァさんはそんなに悪い人じゃ無いです」

無邪気な笑顔をコチラに向けながらアルトが言つ。まだまだガキだとカンナは思いながら脱衣所を出て行く。

部屋に戻ると扉にロックをかける。電気は点けずにベッドに座る。真つ暗な部屋に月の光が差し込む。

カンナはポケットを探る。そして首からかけられる用にチエーンのついたネームプレートを取り出す。

「…………」

金属で作られているプレートは所々赤黒く錆びている。チエーンにも同様の錆び。プレートには『コウナ・イグナイト』と彫られている。その名前はカンナの脳裏に過去の惨劇を蘇らせる。

『そのネームプレートは生き残った隊員が力を振り絞つてターゲットから取った物よ』

レイナはそう言つていた。ホントかどうか分からない。でも、もしホントならば。

「コウナ……」

プレートを強く握る。怒りと悲しみが体を駆け巡る。

ピンポーン。

不意にインター ホンが鳴る。ネームプレートをポケットに直すと
ドアを開ける。

目の前に短髪の女が現れる。

「やつほー！ カンナくん元気？」

「用件は？」

「もお連れないなー！」

ライカはむくれながら言ひ。

「大佐が至急第2会議室に集合だつて」

「了解」

カンナがそのまま外に出よつとするが、ライカが不思議そつに口
チラを見て来る。

「何？」

「ネクタイしないの？」

「しねえけど」

「大佐、服装とかうるさこよ？」

「関係ねえよ。どうせ一時的な補充要員だ。一々服装べりごで言つてこねえだろ」

「ふーん。そっか」

ライカはそう言つと廊下を歩いて行った。カンナもその後を気だるさうに歩いて行く。

「カンナ、ネクタイ締めてこい」

何故こうなる。

4話～日常～（後書き）

また機会がありましたらお会いしましょう

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4529f/>

Sharp

2010年10月9日02時22分発行